

唐木順三全集

筑摩書房版

唐木順三全集第三卷

昭和四十二年八月二十五日初版第一刷發行
昭和五十六年六月一日増補版第一刷發行

著者 唐 木 順 三

發行者 布川角左衛門

發所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—一九一

電話 東京(捌)七六五—(營業)

東京(捌)六七—(編集)

振替 東京 六一四—二二三

印刷 株式會社精興社
製本 鈴木製本株式會社

Printed in Japan

0395—74503—4604

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが小社読者係あてに
ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

次

増補 現代史への試み

- 近代精神——三人稱世界の成立——
- 二 ドストイェフスキイ——三人稱世界から二人稱世界へ——
- 一 論理と心理
- 二 地下室
- 三 謙讓なれ、傲慢なる人よ
- 四 餘 錄
- 三 現代史への試み——型と個性と實存——
- 一 型の喪失
- 二 個性に立つ教養派の擡頭
- 三 教養派の歴史的社會的規定
- 四 教養派の一見本
- 五 讀書と行
- 六 教養派の後退と新なる型
- 七 型そのものとその崩壞
- 八 個性から實存へ

九 コンポシビリテ

附録 媒介と象徴——田邊哲學について——

一〇 形への憧憬

四 言葉の回復.....	一九
五 近代と現代——河上肇と夏目漱石——.....	二三
六 近代日本の思想文化.....	三三
七 教養といふこと.....	三六
八 虚構の魔術化.....	四四
九 デカルトと現代.....	五三
一〇 顔 貌.....	六六
一一 假説の神——太宰 治——.....	六九
一二 残るもの.....	七五
一三 途中の喪失.....	八〇
一四 新しい幸福論のために.....	八六
あとがき.....	八六
新版あとがき.....	八九

自殺について——日本の斷層と重層——

まへがき	三
一 『きけわだつみのこえ』の場合	三
二 巢鴨戦犯の場合	三
三 斷層と重層	三
四 遍歴 へんり りていづくにかゆく	三
五 北村透谷	三
六 藤村 操	三
七 有島武郎	三
八 芥川龍之介	三
九 太宰 治	三
一〇 原口統三	三
一一 山崎晃嗣	三

一二 菅 季 治	三六四
----------------	-----

近代日本文學

一 近代精神と日本文學	三九五
二 個の誕生とその推移	四三三
三 新たな問ひ——見ることから作ることへ	四三三
あとがき	四三七
後 記	四四九

増補 現代史への試み

一 近代精神

——三人稱世界の成立——

一六三一年五月五日付で、デカルトがバルザック宛にアムステルダムから出してゐる手紙から僕の近代精神論を始めるといふことは、決して不適當ではないばかりか、課せられた問題、即ちルネッサンス以後の近代ヨオロッパ精神論を導き出すにこの上ない資料であると思ふ。邦譯されてゐるデカルト書簡集上下二巻を通じてバルザック宛のものは二通しかない。然しその文面にあらはれたところから察するに、バルザックはデカルトにとつて、心おきなく、用心なく語りうる殆ど唯一の友人ではなかつたかと思はれる程である。デカルトの書簡集は、神父さまや女王さま宛のものが多く、屈折光學について、解析幾何學について、或は至高善について、更にまた、魚の焼き方、かまどの燃し方の合理的方法を演繹的に、明晰判明に示してゐるといふ類が壓倒的に多く、いはば今日ならば月々の雑誌の評論欄、論争欄に載せたら適當なものである。それに、ときたまデカルトに加へられた中傷、或は壓迫に對するアポロギイが入つてゐる。今日の讀者は、このアポロギイのうちに、たくまざるユーモアを感じるのが反つて普通であらうが、ガリレイ處刑の事實が身近な當時にあつては、これは決してユーモアどころではなかつたのである。例へばメルセンヌ神父さま宛の一通のなかで、「小生がカルヴィン派の説教を聴きに行くと稱する者があるさうですが、それは全くの中傷です」といひ、自分は一度ひやかし半分に行つたことはあ

るが、その説教は「茶番」に見えた書き、儀式に列することが嫌だつたので、説教が始まつてから入つて、入口のところで立聞したにすぎない等と、固い形で書いてゐる。更に、デカルトが豚の屠殺を見に田舎へ出かけるといつて非難した人への辯解をもそこでしてゐるといふ始末である。

さういふ手紙でうづまつてゐる大部の書簡集のなかで、バルザック宛のものは、いはば自由に心境を吐露してゐる稀なものである。デカルトは他のところで、バルザックを評して、「根が無頓着な男で、靴下止めや飾紐さへ荷厄介にする」性質ではあるが、「變らざる友情を持ち續けることに於ては最も信用の出来る人物」と言つてゐる。あの用心深い、計量的なデカルトも、このやうなバルザックであればこそ、あけすけに己が心情を語りえたわけであらう。さてそのバルザック宛の手紙といふのは次の如きものである。それが一六三一年、アムステルダムからであつたことは記憶されねばならぬ。

「拜啓、貴翰の中に貴下が此の地にお出になる御意向のある由を拜誦致しました時には、私は眠つてゐるのではないかと眼に手を遣りました。そして今でもなほこのお知らせを、何かただ夢の中で見ただけだといふ風にしか、敢へて悦べないで居ります。しかしながら、貴下の如く偉大高潔な精神が、宮廷に於いて人々の強ひられるあの奴隸的束縛に能く順應し得ぬといふことは、私は大して不思議とは思ひません。そして神が貴下に遁世の念を吹きこまれたと眞面目に私に斷言して居られる以上、若し私がかくも神聖な決意を齎へさせようと努めるならば、私は聖靈に對して罪を犯す思ひが致しませう。のみならず、私が貴下の隱棲の地としてアムステルダムをお選びになることをお勧めし、而も、幾多の教養ある人々が隱遁して居られる聖フランシスコ會と聖ブルノ會のあらゆる修道院を措いてといふのみならず、フランスとイタリアの最も美しい居住地、貴下が先年居られたあの有名な

エルミタージュの地さへもさし措いて、此の地を探ることをお勧めするとしても、貴下は私の熱心をお許し下さらねばなりません。田舎の家といふものはどんなに申し分なくできたにせよ、そこには常に、都會にしか見出されない無数の便宜が缺けてゐるものであり、そして希望する孤獨すらも、そこでは決して全く完全といふわけには参りません。如何にもそこには、この上なくお喋りの人々をも夢想させるやうな運河があり、彼等に恍惚と喜悅とを覚えさせることもできるほど孤寂な谷間があるかも知れません。しかしながら生憎と、又多くの下らない隣人達がゐて屢々貴下を惱まし、彼等の訪問はバリでお接しになる訪問よりも更に一層煩はしいといふやうなことも、あり得るのであります。之に引代へ今私のゐる大都會に在つては、商賣を営まぬものとは、私を除いて一人もなく、各人は全く自分の利益に氣を取られてゐて、私は一生の間決して誰の眼にも觸れずにここにゐることができさうです。私は毎日大勢の人々の雑沓の間を、貴下が並木道の中を行くのと同じ自由と寛ろぎとを以て、散歩に出かけます。そしてそこに見かける人々を観ること、なほ貴下の森の中で出會ふ樹木や、或はそこで草を食む動物を観るのと變りありません。彼等の生業のざわめきすらも、そこらの流れのざわめき以上に私の夢想を途絶えさせは致しません。時として彼等の活動に想ひを致せば、私は貴下が貴下の田野を耕す百姓達を見る時と恐らく同じ悦びを受けます。何故なら、彼等の勞働すべては私の居住の地を美しくし、私に何物も不自由させないやうにしてくれるに役立つことを見るからです。若し貴下の果樹園の中に果實の生ふるを見、身を埋めるばかりの豊饒の裡に在ることに悦びありとせば、この地に數々の船舶が來て、印度に産するあらゆるもの、ヨオロッパにあるあらゆる稀有なものを、夥しくわれわれの許に齎すのを見ることにも、亦確かにそれに劣らぬ悦びありとはお思ひにならぬでせうか。望み得る限りのあらゆる生活上の便宜とあらゆる珍奇なものが、この場所ほど容

易に見出される他の場所を、世界の何處に選び得るでありませうか。かくも全き自由を享け得、此處よりも不安なく眠り得、われわれを守らんとして日夜怠りない軍隊が常に在り、毒殺、叛逆、中傷が此處よりも少く、そして我等の父祖の無邪氣さが此處よりも多く名残を留めてゐる國が、他の何處にあるでせうか……」

デカルトのこの手紙は更に續くのだが、引用はやめる。僕が何故この長い引用を敢てしたかについては解説が入用かもしれぬ。いや、この解説によつて僕の課題を果しうるでもあらう。

世に云ふデカルトの隱遁、遁世とは、實は「宮廷に於いて人々の強ひられるあの奴隸的束縛」「多くの下らない隣人達」からの逃避であつたことが明らかである。また修道院や景勝の地への遁世、隱退ではなくて、商業都市への移住であつたことが明らかである。デカルトは當時の世界最大の商業都市アムステルダムを選び、そのあらゆる便宜と自由を利用しつつ、自己の問題を追求してゐた。自己の問題とは何か。『精神指導の規則』は一六二八年頃の執筆と推定されてゐる。『方法敍説』が世に出たのは一六三七年である。アムステルダム滞在の數年はこの間にはさまる時期である。『規則第四』には「事物の眞理を探索するには方法が必要である」といふ副題がつき、そこでは普遍數學 (mathesis universalis)、即ち如何なる對象、質料を扱ふかに關係なく、秩序と計量的關係を扱ふところの學が提唱されてゐる。しかも、すべては數學的に形成されることを信條とし、すべての現象が機械的な法則によつて構成され働いてゐるとするとき、普遍數學は直ちに普遍學であり、即ち學問そのものであつた。それがいはばデカルトの理念である。然し理念へ達するには方法にまつより外にない。「けれども私は自分の弱さを自覺してゐる故、事物の認識を求めるに當つては、常に最も單純、最も容易なものからはじめて、もはやそこにこれ以上望むべきことが残つてゐないと思はれるまでは、決して他へ移行行かぬ、といふ秩序を固

く守ることに決めた」とデカルトは書く。さうして後の『方法敍説』の正式の名前は、「彼の理性を正しく導き、もろもろの學問において眞理を求めるための方法の敍説、なほこの方法の試みなる屈折光學、氣象學、及び幾何學」である。方法、眞理を求めるための確實にして唯一の方法の探求と、その實際への適用、それがデカルトの中心問題であつた。丁度前記のバルザック宛の手紙を書いたころ、デカルトは『宇宙論』に没頭してゐたといはれる。ガリレイ處刑（一六三三年）の報によつて、公刊にいたらなかつたこの論文は、屈折の跡を残しながらも『敍説』の後半に示されてゐるといふ。即ちデカルトの自然學、スコラの言葉の自然學に對する實驗と方法の自然學、恩寵の光にかはる自然の光によつて照し出された自然學、神のはからひに代る理性の自律の近代自然學が、そこに計畫されると同時に、その實際への應用が考へられてゐるのである。デカルトにあつては、いはば基礎醫學と臨床學とは決して別々のものではない。知は力なりはデカルトに於ても眞であつた。さうしてさういふ學問と思想を可能にしたのは、オランダ、殊にアムステルダムの社會風潮であつた。デカルトはアムステルダムといふ環境から全く孤立し、また世間から遁世してゐるかの如くに書き、また史家の多くもさう書いてゐるのだが、孤立を可能にしたのがそもそもアムステルダムといふ近代都市なるが故であり、しかもその孤立は實はアムステルダムからの孤立ではなくして、封建的、宮廷的、教會的、樞機官的なものからの孤立であり、事實は近代都市そのものと密接不離な關係をもち、大膽にいへばデカルトこそ近世商業都市のイデオローグであつたのである。それは單に屠殺場へ行つて豚の解剖を見たり、解剖の對象を自分の家へもちかへつて自らメスをとる便宜、世界の珍奇なる商品に享受しうる便宜ばかりではなく、オランダ特有の宗教宗派に對する寛容、光學機械、殊にレンズを磨く特技、さういふものから受ける便宜ばかりでもなく、新興國家オランダ、近代商業都市の商人的イデオ

ロギイと密接な關係をもつと思ふのである。

ミケランジェロが最後の眼を閉ぢたその日に、ガリレイが生れたことに因んで、「自然はそれによつて藝術が科學に王位を讓つたことを暗示しよう」と欲したかのやうに見えた」とリプリは言つたといふ。ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロの國から、實驗と觀察の科學者が出たこと、それは勿論偶然ではないが、ただちに藝術から科學へといふ延長的發展とは考へられない。ここには深い段層があることが推察される。ルネッサンスから近代科學へ、ヒューマニズムからリベラリズムへ、その移行の下部には段層の違ひがあることが推察される。寧ろこれは移行といふ滑らかなうつりゆきではなく、前者の否定による新しい思想の誕生であらう。近代を單純にルネッサンスから始まるスムーズな發展と見るのは事實とは遠いのではないか。近代科學、またその現實への適用によつて生れる科學文明を生んだのは、迂路を避けていへばアムステルダム的な商人的ブルジョワ的精神であり、それはルネッサンス及びその精神的表現としてのヒューマニズムを生んだ知識人、教養人、文人とは遙かに距たるものであつたのである。ルネッサンス及びヒューマニズムなる言葉と共に聯想されるものもろの雰圍氣、人間性の發見と解放、情緒の解放、古典の發見とそれへの耽溺、古典文學への傾倒とその過大な引用、博學と鑑賞と讚美、野蠻なもの、ゲルマン的ゴートのなるものへの聲援。さうして服裝、言葉遣ひ、社交、祭禮についての細心な心遣ひとその藝術化。ブルックハルトのいふ國家もまた藝術品であるといふ美的世界觀。即ち一方に人間官能の放恣な自由と、それを規制する唯一の原理としての粹。近代科學を生んだものが、凡そさういふもの、及びさういふものを生んだ階層とは異なるものであることは明らかであらう。フィレンツェの馬子はダンテ

の詩句を鼻唄でうたふと誰かが言つたが、さういふ世界とは凡そ相距たる世界からでなくしては近代の自然科学の方法は生れ得なかつたであらう。

デイルタイはその全集二巻中の一節、『創造的ファンタジイの時代から構成的自然科学への移行』において、フランシス・ベーコンの主張する新しい科学も結局エリザベス朝の輝しい空想の一表現であり、市場のイドーラ、洞穴のイドーラといふ如き言葉自體が空想に支配された時代の名残であると言つてゐる。更にケプラーもまたこの空想時代の子であるとし、ケプラーの數學的思惟の中には、音樂的感情、耽美的情緒が結びついてゐると言ひ、彼の立場を客觀的觀念論と規定してゐる。即ちケプラーは宇宙に於て存するものは數學的論理關係と秩序のみであるが、その表現は調和であるとし、また美のみ存すとしてゐる。「巨大なる天界の美觀を仰ぎみたり、この精巧の創造物は汝が全能神のいみじき奇蹟にこそ」といふケプラーの言葉を想ひみるがよい。この傾向は更にガリレイにまで延び、零落こそしたれもとは貴族の、しかも名だたる音樂家を父とした彼は、子供の時から詩と音樂を仕込まれ、ティティアンの畫に親しむといふ生立ちをしてゐる。彼が、宇宙は完全無缺な法則によつて秩序づけられてゐることを信じ、それを最高の藝術品として美的に眺めるといふ傾向をもつてゐたことは偶然ではない。神のはからひを臆測することは人間の僭越である、といふガリレイの考へはなほ前近代的なものであることを示してゐる。

ところでこの人間の僭越を、僭越ではない人間理性の正當な職務として自覺し、人間の側からする「構成的自然科学」を組織しようとしたのがまさにデカルトであり、方法とはまさにそのための方法であつた。空想はここで嚴格なる精神指導の規則の統制のもとに服する。「宇宙は數學的に形成される。」普遍數學はそれを扱ふ學問で

あり、かつそれは可能である。このやうに人間が自らの理性の能力を信じ、しかも理性のどこか無限のないことを信ずる立場を、デイルタイは自由の觀念論として、客觀的觀念論と區別した。近代を中世及びルネッサンス期から區別するものはまさに自由の觀念論であり、それは啓蒙期につながり、フランス革命とカント哲學に於て最高の表現に達したものである。

自由の觀念論はまた一方、生活態度、思考様相、經濟、政治面にあらはれて來たりベラリズムと相關聯する。リベラリズムはまた土地所有者、領主、教會からの解放、その解放主體としてのブルジョワの勃興を前提とするものである。十六世紀末から十七世紀へかけて、徐々に資本家的、企業家的精神が社會の表面に出てくる。ハロルド・ラスキは『ヨーロッパ自由主義の勃興』（一九三六年）に於て、我々の當面の問題に克明に答へてゐる。資本家的、企業家的精神とは何か。それは富を富自身のために求めることである。中世に於ては富の獲得、或はそれを獲得しようとする企業は、教會或は教條によつて制限され、抑壓されてゐた。十七世紀初頭にいたつて、そのやうな制限または抑壓は不當とされるにいたり、生産の増加に支障を來す諸觀念は批判され捨て去られるにいたる。さうして自由な創意と無限な企業とがそれに代る。リベラリズムとはこの新時代の哲學であり、イデオロギイであつた。古代においては賢者が、中世においては聖者が最高の型であり、理念であつた。いまやそれに代つて新しい企業家といふ型が歴史の上に現はれる。富の獲得、無限な欲望、それを充足する手段への熱意、それを邪魔するものへの闘争、富への相互の競争。機械は發明されると同時に利用されねばならぬ。原料を確實に入手する方途を講ぜねばならぬ。道路と航路は開かれ、また安全な交通路とならねばならぬ。市場は開かれ、かつ自